

学校教育目標	校訓「誠実・協和・努力」の精神をもとに、自他を大切にし、自ら学ぶ、心豊かでたくましい生徒を育成する。
--------	--

《本年度の重点目標》	
《重点目標1》	課題意識をもち、主体的に学び、解決する「確かな学力」の育成
《重点目標2》	感謝の気持ちをもち、よりよい人間関係を築こうとする「心の育ち」の推進
《重点目標3》	健康で活力ある生活を送るための「健やかな体」の育成

【評価】 A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった

取組	評価項目	評価項目についての重点的取組	評価	○成果と◆次年度の改善点
学力向上に関する取組	【授業改善】 ◇〈質問紙(59)〉「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。 ◇〈質問紙(54)〉「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○全教員が「わかる授業づくり5つのポイント」を徹底するとともに、校内授業研究会を年間1教師1回以上を目途に実施し、「5つのポイント」の質の向上を図る。 また、学力向上推進教員が参観する際には、「向洋版授業改善シート」を活用し、職員も一緒に参加しながら、その後の協議会にも参加する。協議会では、「わかる授業づくり5つのポイント」を重点的に確認し、意見交換を行うことで授業改善に取り組んでいく。 ○GLT集会や掲示を通じて、「向洋中学びのスタンダード」を確立する。	B	○生徒の思考が深まるよう「GLT(話し合い活動)」のプロセス等の改善<<付箋セットを常備。各班の意見交流結果をまとめたプリント配付。等>>に取り組み、質の向上を目指した。 ○「振り返り」の時間の確保と質の向上を図った。<<・毎時間、個票に記述して提出する。・単元ごとの振り返りシートに毎時間記述して提出する。等>> ○毎学期、始業式後にはGLT集会を行い、「GLTの作法」や「振り返りの重要性」について、全校生徒に周知した。特に、3学期は生徒会が説明をし、生徒の主体的な実践に繋げることができた。 ○全教員が「向洋版授業改善シート」を活用して、1教師1回以上の校内授業研究を実施したり、学力・体力向上推進教員が授業参観する際に一緒に参観したりして、日常的に授業力向上を図った。 ○学力・体力向上推進教員によるモデル授業は全員で参観し、その後は、ワークショップ型の校内研修会で、「わかる授業5つのポイント」を徹底することを確認した。 ◆〈質問紙(59)〉で肯定的な回答をする生徒の割合が目標に到達していないが、GLT集会等を通して、生徒の評価基準が高まったことも要因の1つと考える。次年度は、教員の日常的な授業力向上研修を充実させるとともに、生徒の主体的な取組<<・生徒主導のGLT集会。・生徒が他学級の授業を見合い、その後の話し合いで、学級での重点的取組を決める。等>>を推進して、【向洋中学びのスタンダード】の浸透を図る。 ○〈質問紙(62)〉で肯定的な回答をする生徒の割合は目標に到達した。毎時間、授業の中に「振り返り」の時間を確保する教科が増えたので、次年度も継続して、振り返りの時間を確保していく。
	【補充学習】 ◇帰りの会前の特設の学習時間「学力向上タイム」の継続的な実施 ◇「学力定着サポートシステム」を個別の指導へ活用する。 ◇〈質問紙(54)〉「読書は好きだ。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○特設時間帯「学力向上タイム」の取組を昨年度同様、継続して行い、基礎基本の学習時間を確保し活用する。その際、「学力定着サポートシステム」の課題を活用し、各自が課題を選択しながら学習に取り組むようにする。 ○定期的に向洋検定を実施し、合格できなかった生徒は、補充学習や個に応じた指導を行い、基礎学力の向上を図る。 ○全学年で朝読書を実施し、表現力・読解力の向上を目指す。また、単に読むだけでなく、感想文やブックトークなどに取り組み、自分の考えを限られた時間でまとめ、伝える機会を多く確保する。	B	○毎日、清掃後の「学力向上タイム」を継続的に実施した。併せて、28年度～向洋中独自作成して取り組んでいる「向洋検定」や「学力定着サポートシステム」を活用し、基礎的な学力向上に努めた。 ○効果的な支援、補充学習を推進していくために、職員室前廊下に「Let's Try Studying」の机を設置した。 ○「学力定着サポートシステム」の診断問題を活用し、生徒の実態把握に努めた。 ◆次年度、「学力定着サポートシステム」の診断問題で把握した生徒一人ひとりのつまずきについて、裁量型「子どもひまわり学習塾」とも連携して、個別の補充学習を充実していく。 ○自分の考えを限られた時間でまとめ、伝える機会を多く確保するために、感想文や発表活動に取り組ませた。 ◆〈質問紙(72)〉で肯定的な回答をする生徒の割合が若干目標に到達していない。どの学級も落ち着いた雰囲気朝読書に取り組んでいるが、個々に好きな本を読んでいるので、読解力に結び付いていないことが窺える。次年度は、国語科教員が精選し本を、学級全員で読む週間を位置づけるようにしていく。
	【家庭学習】 ◇〈質問紙(14)〉「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」について、「全くしない」と回答した生徒の割合の減少。	○管理職・学年主任・学級担任による、学校だより、学年だより、学級だより等を通じた「家庭学習のススメ」や家庭学習時間増への取組の実施(最低年1回) ○管理職による、宿泊行事の説明会等を活用した本校の学力の現状について説明や、PTA役員やPTAの各委員会担当者によるPTAを巻き込んだ家庭学習時間増への取組の実施(最低学期に1回) ○担当者による向洋中版「毎日の記録」の改訂(年1回)と、担任による、日々の「毎日の記録」点検活動による、家庭学習時間増へのはたらきかけ(毎日) ○管理職・教務主任が、小中連携の「生活のきまり」の中に、家庭学習習慣に関する項目を盛り込む。	B	○国語、数学、英語を中心に、週末課題に取り組みせ、家庭学習の充実を図った。 ○家庭学習習慣の定着について、学校通信及びPTA理事会・各学年の保護者説明会等、機会あるごとに家庭への啓発を行った。 ○校区小学校と連携して作成した「生活のきまり」の中に、家庭学習習慣に関する項目を盛り込み、配付した。 ○担任による、日々の「毎日の記録」点検活動による、家庭学習時間増への働きかけを行った。次年度は、「毎日の記録+1Pずつの自主学習ができる方眼紙版」(向洋ノート)を生徒会とともに作成して活用する。小石小・赤崎小6年生も使用する方向である。 ○毎学期初めのGLT集会で、「家庭学習の習慣づけ」について、全校生徒に周知した。特に、3学期は、ネット使用時間とも関連させて、生徒会が自覚を促した。 ○「放課後の時間をデザインしよう」の取組を学級活動で行い、家庭での生活について、ネット使用時間とも関連させて、家庭と連携して取り組んだ。 ◆〈質問紙(14)〉で「全くしない」と回答した生徒の割合は目標に到達していないが、「60分以上勉強している」生徒の割合は増加している。次年度は、職員室前の教科連絡黒板に教科担任が課題を書くようにし、生徒・教員双方が提出日や量を把握できるようにする。
	【特別支援教育推進】 ◇ユニバーサルデザインの授業を推進する。 ◇生徒の教育的ニーズを把握して、関係機関と適切に連携しながら、自立に向かうための支援の校内体制を構築する。	○全教員の共通理解のもと、ユニバーサルデザインの授業を推進する。 ○特別支援教育委員会で、個々の生徒の教育的ニーズ把握し、その特性や対応の仕方等について全職員が理解を深め、家庭や関係機関との連携のもとで指導の充実を図る。	B	○前面の掲示物の制限や大型タイマーの活用等を、全教室で統一することで、ユニバーサルデザイン授業を充実することができた。 ○月2回、特別支援教育委員会を実施し、個々の生徒の実態把握と共有に努め、個別にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、少年支援室等の関係機関と連携を図った。また、必要に応じて、ケース会議をすることができた。 ○巡回相談や教育相談を活用して、適切な助言を受け、日頃の指導に生かすことができた。 ◆次年度は、小中の特別支援教育コーディネーターを核として、小中で連携した取り組み体制を確立していく必要がある。
心の育ちに関する取組	【特別活動・道徳等の充実①】 ◇〈質問紙(6)〉「自分には、よいところがあると思いますか。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。 ◇〈質問紙(9)〉「将来の夢や目標を持っていますか。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○特別活動コアスクールの取組(学級活動、学校行事等)や学期に一度学級担任が「北九州子どもつながりプログラム」の取組を通して、生徒同士の人間関係、相互信頼関係を深めるとともに、学級や学年、学校への所属感を高め、自己肯定感の醸成に努める。 ○掲示物の担当が校内の掲示板に生徒の夢や目標をもつことをうながす詩や人生の素晴らしさ等を謳った短文の掲示を季節ごとに(学期に1度)を行う。 ○担任が、道徳の内容項目「希望・勇気、克己と強い意志」に関する教材を年間2回実施する。 ○「SUTEKIアンケート」を実施し、個別の生徒の実態を把握し、皆で共通理解を図り、きめ細かな対応する。	B	○話し合い活動では他者の意見に耳を傾け、相槌や拍手等のリアクションを大事に取り組み、他者の意見に傾聴し、認め合う雰囲気醸成した。 ○各学年の生徒の実態に合わせた内容の掲示物を吟味し、継続的に掲示することができた。 ○時間割を調整して、生徒指導委員会・特別支援教育委員会を隔週で開催し、各学年の個別の生徒の実態を把握し、全職員で共通理解を図って対応した。 ○「学級会の意見箱」を設置したり、帰りの会で気付いたことを述べさせたりして、生徒が課題意識をもって主体的に取り組むようにした。 ○学級会で決まったこと等の掲示物の充実にも努め、実践の意欲が高まるようにした。 ○特別活動コアスクール実践報告会では、日々の授業で行っているGLTを活かした学級会の形態と、この字型に配置して全員で議論する形態の2通りを提案し、協議会で、「参考になった」との意見を多数いただいた。 ○〈質問紙(6)〉において、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標を達成した。 ◆〈質問紙(9)〉において、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標を達成しなかった。次年度は、今年度実施して成果があった「高校調べ」等の取組に加え、職場見学等のキャリア教育を充実させていく必要がある。
	【特別活動・道徳等の充実②】 ◇〈質問紙(43)〉「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○道徳教育担当者や担任が、道徳の教材で「勤労」や「社会参画、公共の精神」などに関わるものを年間計3回実施する。 ○総合的な学習の時間の取組として、地域での奉仕活動として「ゴミゼロ」運動を全校で実施したり、地域行事への参加を呼び掛けたりして、生徒に自己有用感を味わわせる。 ○学級や行事の取組において、一人一人に役割を与えるようにし、賞賛したり、認め合ったりする。	A	○「ゴミゼロ」運動を実施した。地域行事・ボランティア活動の参加を呼び掛けた。 ○農村民泊体験学習の取組など、生徒が社会参画や勤労を実感できる取組を行った。 ○道徳の教材で「勤労」や「社会参画、公共の精神」などに関わるものを実施した。 ○学級での活動や、学校行事・地域行事を通じて、生徒に自己における自己の所属感を高めることができた。 ○〈質問紙(43)〉において、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標を達成した。次年度も、特別活動や道徳の時間の充実を図ったり、地域行事やボランティア活動への参加を促したりしていく。
	【いじめ問題解決】 ◇生徒アンケート「私は楽しく学校に来ることができている」について、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○学校全体での計画に基づき、特別活動の時間や行事の取組を充実させて、生徒同士の人間関係を深めるとともに、自己有用感の醸成に努めて、いじめの未然防止に繋げる。 ○アンケートや教育相談を通して、実態把握に努め、いじめの早期発見・早期解決に全力を挙げる。 ○生徒会活動を通して、アクアリボンの取組を、新入生に説明したり、定期的に生徒会行事などで必要性を訴えたりする。 ○計画的な人権・同和に関する職員研修を通して、職員の人権・同和意識を向上させる。 ○生徒と保護者を対象に、スマートフォンやSNS利用に潜む危険性について継続的に啓発する。	B	○生徒会を中心に「いじめをしない、させない」アクアリボンの取組を継続できた。 ○人権教育を通して生徒の人権意識が向上するように努めた。 ○人権・同和に関する職員研修を計画的に行なった。 ○SNS使用や情報モラルに関しては、警察官等を講師とした講演会を2回行った他、学活やSNSのトラブルが発生した折等、日常的に指導をした。 ○スマートフォン所持させる際の家庭でのルール作りについて、学校通信及びPTA理事会・各学年の保護者説明会等、機会あるごとに家庭への啓発を行った。 ○全職員が日頃の声かけ、教育相談、家庭訪問等で、カウンセリングマインドに基づいた指導をするとともに、学年を超えた教師間の情報交換や行動連携を旨とした生徒指導体制が確立されているので、問題事象に対する早期発見、組織的な指導はできている。 ○生徒アンケートにおいて、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標を達成した。次年度は、LGBTIに関する生徒・保護者向けの講演会を行い、さらに確かな人権感覚を育てていく。
【あいさつ日本一】 ◇生徒アンケート「私は自主的によく挨拶をしている」について、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○生徒会執行部及び評議委員会が中心となり毎月0の日あいさつ運動に全校で取り組む。 ○「立ちどまって自分からあいさつ」を合い言葉に、全職員で、継続的な声かけを行う。	A	○生徒アンケートにおいて、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標を達成した。「あいさつが学校の自慢である」という生徒も多い。 ○学校外でも、地域の方から「よく挨拶をする」というお褒めの言葉を複数いただいている。 ○全職員で「立ちどまって自分からあいさつ」の声かけを行った。また、授業始業時と終わりの挨拶の徹底も図った。 ○部活動においても、礼儀や挨拶に重きを置いて指導をしている。	
体力向上に関する取組	【授業改善】 ◇〈質問紙(17)〉「体育の授業は楽しいですか」において、肯定的な回答をする生徒の割合の増加。	○保健体育科の授業において、保健体育科の担当が30分以上の運動量を確保するとともに、生徒が達成感や運動の喜びが実感できる授業展開を積極的に取り組む。 ○管理職や学力・体力向上推進教員が授業見学をし、授業改善につながる助言を行う。	A	○全ての種目において汗をかくほどの運動量を確保でき、基礎体力が向上してきた。 ○運動やスポーツを苦手とする女子が多数いるにもかかわらず、〈質問紙(17)〉で、肯定的な回答をする生徒の割合は、目標に達している。体育科教師が運動が苦手な生徒への指導・支援をできるだけ多く行ったり、生徒個々の主体的な取組<<・GLTで本時のめあてを決める。・互いに助言し合ったりする。等>>を取り入れたりした成果である。 ○どの種目においても30分以上の運動量を確保し、毎時間の振り返りは、その日の課題としている。体育科教師が点検して生徒の学習意欲の継続を図っている。 ◆毎時間の振り返りの継続で、書く力は身に付いてきているが、書ける生徒と書けない生徒の差があるので、書けない生徒には、具体的に助言をしていく必要がある。
	【運動習慣】 ◇新体力テストの総合評価において、D・E判定の生徒の割合の減少。	○毎時間授業開始時に、集団走・柔軟運動・準備運動・筋肉トレーニング・体つくりの運動を実施するとともに、学習する種目の特性に応じた体力向上につながる補強運動を取り入れる。 ○全国平均と合計得点、総合評価判定の記録を配布し、視覚化することで、生徒が目標をもって取り組めるように意識づけを行う。 ○管理職・教務主任が、小中連携の「生活のきまり」の中に、運動習慣に関する項目を盛り込む。	B	○校区小学校と連携して作成した「生活のきまり」の中に、運動習慣に関する項目を盛り込み、配付した。 ○毎時間、授業開始の5～10分間、種目に応じた準備運動や補強運動、柔軟運動を取り入れ、基礎体力の向上を図った。 ○新体力テストの全国平均を配布し、全国平均を超えることを目標にさせ、意識を高めるよう取り組んだ。 ○ハンドボールの授業を取り入れ、次年度の記録向上につながるよう取り組んだ。 ○昼休みにボールの貸出を行い、グラウンドを開放して体を動かす機会を増やしている。雨天時については、1学年ずつローテーションで体育館を開放している。 ○新体力テストの総合評価におけるD・E判定の生徒の割合の目標を達成することはできた。次年度は、課題のある種目について取り組んだり、各学年の昼休みのグラウンドでの運動を推奨する取組をしたりして、全生徒の体力向上を図る。 ◆次年度は、朝食の充実を図る等、学力・体力向上の基盤となる「食育」の取組も充実させていく。